

シゲは極道者であったが、子供好きであった。大榎に子供が集まるのは、榎の実が目的というよりシゲを相手に遊びたいからであろう。庄平の庭の芙蓉と同じく、榎はここだけにある木ではない。無職の身軽さからシゲはよく子供たちと遊んだ。メンコ、ベイゴマになると、シゲの方がよけいたのしんでいるふしすらあった。

だが、親たちは子供がシゲに近づくのを好まなかった。やくざからいいことを憶えてくるはずがないと考える。禁じられるとなお行きたがるのは

は見学に甘んじているほかない。はじめて鉦を扱わせてもらえるようになった四年坊主たちはこのうえもなく張り切り、緊張しすぎて間違える者もある。

高校生になった若者は囃子に加わらない。いつとはなく同級生との仲も疎遠になっているのである。

毎秋、囃子の練習が始まると、さすがにシゲの家の裏手も淋しくなるのだ。

花ノ根の初霜は早い。とにかくカミノヒガシでは、産土神社の秋祭りが終わるか終わらぬうちに

子供の常、庄平の家の芙蓉が好んでねらわれるのと同じ意味である。

シモに多い稲田が色づく。木戸ゆいの店と谷川を隔てた橋ぎわにある集会所では祭り囃子の練習が始まる。中学校は卒業して、高校へ進まなかつた若者たちが中心になって指導するのである。

中学三年生が大太鼓、二年生が小太鼓、一年生が大鼓を打つ。小学校六年は小鼓、五年は笛、四年は鉦を受け持つ。編成はこれだけだから三年以下

やってくる。滝の仁作が兎ワナに取りかかるのは、その初霜のころである。シダの茂みを歩きながら、針金づくりの簡単な輪をウサギ道に仕掛けてまわる。

ウサギ道を見つけることは花ノ根の者なら誰でもできる。しかし、ウサギが掛かるように罫を仕掛けるのはむずかしい。滝つぼの岩魚や山女魚が仁作の掌から逃がられないように、兎も仁作の罫に好んでかかるようである。

滝の仁作がシダを踏み折る音は、花ノ根の冬の

訪れでもあるわけだ。

そして、その冬―。

カワラ木と花ノ根を結ぶ大川シモの橋の下の広い河原は、夏の水量を示して川垢が白々と濁きあがる。その川沿いの道を学生服姿の若者が大きなボストンバッグを下げて歩いてきたとき、麦の世話をしていたナガレの住人は、それが誰であつたか咄嗟には思い出せなかったものだ。若者は、野良仕事中の住人と顔を合わせると気軽に頭を下げ、時には声もかけて過ぎた。

でありましょう。ほんとうに五郎助は馬鹿な、かわいそうな父親であります」

花ノ根はこぞつて五郎助に同情したのである。もともと向学心の低いこの花ノ根、なおのことこしばらくは子供を大学へ進学させる者が出ないであろう。

節介屋のおゆい後家など、わざわざ五郎助を見舞う口実で、実情偵察に出かけたものである。ゼンガクレンは奥のカマ場へ炭出しに出かけて留守であった。五郎助は土間のむしろの上で炭俵

「あれは、それ、五郎助の家のむすこであります。りつぱになつたものであります」

大学の四年間、この花ノ根に帰省したことがなかった犬井八郎が学業を終えて帰村したことは、その日のうちに花ノ根全域に知れ渡つた。

そして八郎がゼンガクレンで就職に失敗し、止むなく帰つてきたのだという噂も、広がるのに一週間とはかからなかつた。

「娘を売つてまで大学へ進ませてやって、ゼンガクレンになつて帰つてくるとは、どういふこと

を編むことに専念していた。

「現代の青年たちが考えていることは、私たちが古い思想しか持っていない者には、さっぱりわかりません。あなたほど同情に値いする人間がいるでありますようか」

ゆいは涙ぐみ、鼻をつまらせながら、こういつて五郎助の同意を求めた。カヤをたぐりたぐり黙々と炭俵を編んでいる五郎助を見るうち、それまでの好奇心はどこへやら、ゆいはほんとうに心からこの哀れな父親に同情してしまつたのである。

五郎助は驚いて顔を上げた。

「あなたのお心根はたいへん勿体ないのでありますが、若い人間には若い人間としての考え方が育っているのでありまして、若い人間の考えていることが理解できないのは、私たち古い人間の常でありまして、そのことについては私は少しも悲しんでいないのであります。私が悲しいのは、八郎がこの花ノ根へ戻ってきたことで、極悪非道な不孝者扱いを受けるかも知れないことでもあります。八郎はゼンガクレンではありませんし、

のやり場がなくなつたのだ。様子をさぐりにきた当初の下心などすっかり棚に上げ、カミノヒガシのこのような奥まで足を運んできた自分のお人好し加減に、胸がむかついた。

おゆい後家はその足で滝の仁作の家へ駆けこんだものだ。

「このような考え方をするのは、五郎助も昔からゼンガクレンであつたのでありましようか」

仁作は日だまりで兎の皮をはぎながら、

「五郎助は、昔からゼンガクレンであつたのでありましようか」

このたび村へ帰ってきましたことも、年老いた

父親である私の身を案じてのことでありまして、それについては、いっそ私はありがたい、うれしいことであると思つているのであります。あなたには、いまの私の誇らしさなど、どうせ感じてもらえないのでありましよう」

さすが花ノ根はじまっていらいの英才、考え方ももちろんとした筋がとおつていた。たまげたのはゆいである。たまげたついでに、腹を立てた。

自分のあたたかい思いやりをはねかえされて、涙

と、ゆいの疑問を口うつしにくり返した。仁作にはゼンガクレンのことなど関心はなく、兎の肉をことしはゆいがいくらに買ってくれるかが気にかつていた。

「夏場のイワナやヤマメは、自分でも水浴びをたのしみながらとるので焼酎だけでいいのであります、ウサギの肉は、焼酎のほかにくばくかの現金も欲しいものであると願つております」

ゆいは風向きがおかしくなつたので、挨拶もそこそこに仁作の家を飛び出した。カッパまでど

やら狂っているようだ、後家はひとり毒づいた。

五郎助ゼンガクレン説はほどなく木戸デパートを拠点に花ノ根に広がったが、中村ソノは一笑に付した。根拠はない。

もし、ゆいが五郎助をほめていたら、ソノは立場を逆にしていただけのことである。ソノの二人の娘は母親が五郎助父子に同情的なのを喜んだ。花ノ根唯一の大学卒インテリゲンツィアの存在は、国家試験をパスしてきた彼女たちのインテリジェンスをデリケートにくすぐっていたのである。ソノはいう。

なったような気分には誰も快いことであつたからだ。

思いもよらぬかたちで火の手が上がり、自分で燃え移ったものだから、木戸ゆいは火元の中村ソノに対して青くなって憤った。

この二人の後家がいつ、どのように衝突するか、花ノ根は固唾をのんで期待している。

花ノ根のゼンガクレン対策について、いちはやく三野庄平のもとへ相談にいったのは、村議の小原恵吉と多山健吾である。正月の年始あいさつ

「おゆいという後家は、だいたいどのていどまでの賢明さなのでありませんか。ゼンガクレンなど何もわかっていないのであります。愚か者は愚か者らしく、あまり出歩かないことでもあります」

実はソノにもわかっていない。だから木戸ゆいを馬鹿呼ばわりすることに終始してしまうのである。

木戸ゆい暗愚論は中村芸術美容館を基地に花ノ根を馳せめぐって、五郎助ゼンガクレン説を席卷した。他人を見下げ果てることで自分が偉く

を兼ねてのことであつたが、村政に参画する身とあればそれも当然の措置であつたらう。庄平は平然としていた。

「ゼンガクレンというのは、多勢でいるからゼンガクレンであつて、八郎はひとりであります。たとえ五郎助がゼンガクレン派でありましようとも、ただの二人では何もやりようがないのであります。それに、八郎がゼンガクレンであるとは、誰から教えられたのでありますか」

恵吉も健吾も、単に花ノ根に流布している噂を

信じこんでいるにすぎない。

「ほんとうに八郎がゼンガクレンであるかどうか、もうしばらく静観（せいかん）して決（けつ）して遅（おそ）くはないのであります」

元老（げんろう）にこういわれては、この二人（ふたり）にあえて主張（しゅちやう）する何（なに）かがあるわけではなかった。

当（とう）の八郎（はちろう）は、自分（じぶん）がゼンガクレンといわれていることなど問題（もんだい）にせず、炭俵（すみだわら）をかつきおろしては大八車（だいはちぐるま）に積（つ）んで、ナガレの共同集荷場（きやうじゅうかじやう）まで運（はこ）んでいた。道（みち）で会（あ）う人（ひと）とは誰（だれ）とでも愛想（あいそ）よく話（はなし）をし

したから、工場主（こうじやうぬし）がすっかり惚（ほ）れこんで経営（けいえい）の片腕（かたうで）と囑望（しよぼう）した。八郎（はちろう）はすでに社会的地位（しゃかいてい）すら芽（め）ばえはじめているのである。
(以上7月30日放送分)

たし、帰（かえ）りの空車（くうしゃ）には学校帰（がっこうがえ）りの小学生（しょうがくせい）を乗（の）せてやったりもした。大学卒（だいがくそつ）といった思（おも）いあがつたそぶりなどすこしもないので、花ノ根（はなのね）の住人（じゅうにん）たちもゼンガクレンに対する認識（にんしき）を改（あらた）めざるを得（え）なくていった。

ちようどカワラ木の製材工場（せいざいこうじやう）で事務員（じむいん）を欲（ほ）がっていたのを知（し）った初瀬徳左右衛門（はつせとくざえもん）が紹介（しょうかい）して月給（げつきゆう）とりになったりしたことから、ゼンガクレンはいつしか特殊（とくしゆ）な目（め）で見（み）られることもなくなつた。製材工場（せいざいこうじやう）でも八郎（はちろう）は有能（ゆうのう）な事務能力（じむのうりよく）を發揮（はつき）